



TITLE:

ベンヤミンの「法」と「ことば」 について:暴力論読解の手がかりを 探る

AUTHOR(S):

小田, 直史

CITATION:

小田, 直史. ベンヤミンの「法」と「ことば」について:暴力論読解の手がかりを
探る. 文明構造論: 京都大学大学院人間・環境学研究科現代
文明論講座文明構造論分野論集 2005, 1: 47-68

ISSUE DATE:

2005-08-05

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/89703>

RIGHT:

ベンヤミンの「法」と「ことば」について — 暴力論読解の手がかりを探る —

小 田 直 史

はじめに—「法」と「言語」

「正義」(Gerechtigkeit) が氾濫している。暴力手段が用いられるところでは、しばしば「正義」が叫ばれるが、紛争世界の外部に立てば、そのようにして叫ばれる「正義」も、単に暴力手段の正当化でしかないように思われる。「正義とは何なのか」、このような問いをたてる前に、そもそも何が〈正しい〉とされるのか、その〈正しい〉と言われるものを分析する必要があるだろう。

〈正しい〉とは、ある事柄を目的とし、その目的を実現するための手段が目的に適っている場合に用いられる判断である。この場合、目的そのものが〈正しい〉のか否かが問題なのではなく、与えられた目的に適った手段を〈正しく〉用いているか否かが〈正しい〉という判断の規準になる。それゆえ、この判断は、目的そのものを判断するのではなく、目的の実現のために用いられる手段を判断するのである。

〈正しさ〉とは目的遂行の手段に対する判断なのだが、それならば手段は、あらゆる目的に盲目的に従うことになるのだろうか。それはすなわち、「殺しても良いのか?」という問いに対して、目的が殺すことならば「殺しても良い」と判断することが〈正しい〉判断なのかを問うことである。例外的な状況、例えば紛争や戦争にあっては、「殺しても良い」とする判断が頻繁に生じるが、それは目的を設定する権力者の強制に拠るところが大きいからであり、我々がそのような強制に拠らないところで「殺しても良いのか?」と問う際には、目的を遂行しようとする者の目的に対する「責任」が判断の規準となる。この場合には、殺しという行為が遂行者の「正義」になる。もし彼の行為が「正義」ではないとすれば、彼は単に暴力的な手段をぶちまけている

だけの者となり、たんなる無法者になる。

こうしてみると、〈正しさ〉の判断には 2 つの規準が想定されているということが解る。それは、設定された目的に対する手段の〈正しさ〉と、おのれが〈正しい〉と捉えるところの目的に向けて手段を行使する、目的手段の〈正しさ〉である。前者は設定され、強制される目的へと盲目的に従属するが、後者はおのれが設定した目的と、その実現のために用いられる手段の〈正しさ〉を、おのれ自身の「責任」(Verantwortung)として引き受ける。これが〈正しさ〉についての二つの判断なのだが、このそれぞれの判断が同様に〈正しい〉と捉える目的こそが「正義」なのである。

紛争世界で叫ばれる「正義」とは、総じて暴力手段の正当化なのであり、目的が奨励するところの手段を用いた殺人へと人々を誘導する。そこでは、暴力手段こそが〈正しい〉手段になり、そのような暴力手段によって獲得されるであろうそもそもの目的が手段の遂行者によって非難されることなどない。紛争世界で叫ばれる「正義」が、その目的遂行者によって廃棄されることはないし、そのように叫ばれる「正義」の強制力が強ければ強いほど、暴力手段を用いることへの批判も減少する。紛争世界では権力者によって「正義」が措定され、権力者のもとに集う者によって目的遂行のために暴力が行使されるのである。

「正義」と目的遂行のための手段は、何も紛争世界に限ったものではない。「正義」が権力者によって措定され、そこに集う者に強制されるものだとなれば、この同じ強制機能は日常にあっても見いだすことができる。それは「法」(Recht)の措定にまつわる強制であり、「法」が定めるところへと服従を強いる「法」の力である。

ヴァルター・ベンヤミン(Walter Benjamin, 1892-1940)は「暴力批判論」(1921)のなかで「法」の措定と「暴力」の関係をギリシャ神話に倣って語っている。そこではニオベの伝説とプロメテウスの伝説が用いられているが、ベンヤミンは、これら神話の神々を挑発する者が、神(レトとゼウス)から被った「運命」(Schicksal)こそ、「法」の根源的な形態にはかならないと言っている。¹ニオベは彼女がレトより子ど

¹ Walter Benjamin: "Zur Kritik der Gewalt", *Walter Benjamin Gesammelte Schriften* Bd. II-1, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag, 1977, S.197. 本稿でベンヤミンの著作を扱う際、以下の版を使用している。Walter Benjamin: *Walter Benjamin Gesammelte Schriften*.

もに恵まれたことを誇った廉で、レトによって召喚された 2 人の息子（アポロとアルテミス）に彼女の 14 人の息子、娘を次々と殺されていく。プロメテウスはアテナの助力によって天へと登り、太陽の火をおのれの松明へと移し、その火を人間へと引き渡した廉で、ゼウスによって山肌に繋がれ、禿鷹の襲来に苛まれた。ベンヤミンによれば、これらギリシャ神話に登場する神に裁かれし者たちは、彼らの行為が違法なもの（「法」に反する行為）だったがゆえに裁かれたのではないという。ニオベは神を挑発した廉で、「運命」を背負わされ、プロメテウスは「運命」を挑発した廉で、禍を被る。このように彼らへと向けられた「運命」が常に彼らを支配することで、そこには根源的な「法」が形作られることになる。²「運命」にしたがってのみ人間は人間としてあるのだが、彼はそのように宛てがわれた「運命」に叛逆した廉で、神の怒りに駆られたのである。神による息子、娘の殲滅への悲しみから、ニオベは父タンタロスのもと（シピュロス）に戻り、ゼウスに祈って、おのれを石へと変えた。石になった彼女の涙が止むことはなかったという。プロメテウスはゼウスによってコーカサスの山に繋がれ、そこで禿鷹の襲来に生涯苛まれることになった。彼の不死身の身体は、禿鷹の襲来を受ける度に再生し、彼への苦痛はその度に新たにされたという。彼らは神の「正義」によって、「人間と神々との間の境界石」³にされたのである。

ギリシャ神話では、神と人間との間に、「運命」に対する叛逆の印として「境界石」が設けられる。それは「法」の根源的な形であり、永遠に罪を背負うもののシンボルとなる。ならば我々の「法」はどうだろうか。近代の「法」は、「議会」の承認を経て施行されるのが常で、その限りでは神話的な神のように、「法」を「直接的に」指定することはない。「議会」は、国民を代表する者によって構成され、そのような場で「法」の審議がなされるので、「法」の指定が権力者によって直接的になされる危険を回避している。「議会」の目的は「法」を指定することなのだが、それは間接的な手段、すなわち、「議会」という話し合う場によって達成されるものであり、支配者の「暴力」(Gewalt) によって「法」を宛てがう神話的な法指定とは異なっている。

「法」の神話的な起源が、神と人間との間の「境界石」ならば、「法」そのものの

Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag, 1974-1989. 以下の引用脚注では *GS* と略記する。

² Walter Benjamin: a.a.O., S.197.

³ Walter Benjamin: a.a.O., S.197.

起源には神から人間への直接的な「暴力」が関係していることになる。「運命」への盲目的な服従が人間には求められているのであり、「運命」という目的に背くものには「暴力」が加えられるのである。「議会」は「法」の措定を話し合いによって間接的に行うが、国民を統制する目的で「法」を措定する。国民を統制する目的に従うという意味では、「議会」における間接的な「法」の措定も、「暴力」をそのうちに孕んでいる。「議会」における「正義」が「法」の措定にあるのだとすれば、「議会」が依拠する目的から「暴力」を取り除くことなどできない。「法」の措定は「暴力」なのである。神話世界ではニオベやプロメテウスの生き永らえる姿が法の根源的なシンボルとなったように、現代の「法」にもそのようなシンボリックな側面を認めることができる。それこそが「言語」(Sprache)という「法」なのであり、善悪の目印となった「言語」なのである。

本稿の目的は、ベンヤミンの言語論に暴力論読解の手がかりを見いだすことである。「法」とは、上に見たように、人間と神話的な神々との関係にあって生み出され、シンボル化された「言語」なのである。人間の「運命」は、神からの「暴力」によって規定される。しかし、そのようにして宛てがわれた「運命」にプロメテウスは刃向かうのであり、その刃向かいが彼に再び「運命」を呼び寄せる。人間はプロメテウスの盗みによってあらゆる能力を付与されたが、それはプロメテウス本人の「正義」が神の定める「法」を打ち破ったことでなされた業なのであり、プロメテウスはそれゆえに運命と闘う「英雄」になるのである。人はプロメテウスの勇敢さを礼賛する。それは神によって定められた「運命」を彼が挑発し、打ち破ろうとするからなのであり、そのような彼の態度ゆえに、彼の行ないは「英雄伝説」として語り継がれることになったのである。しかし、プロメテウスは、彼への血の「暴力」によって、彼の違法への補償を強いられている。彼はおのれの身体から血を流し、肉をえぐられる代償をゼウスに対して負うたのである。違法行為に神は血を要求する。それは犯罪人の血を欲する神の意志であり、「法」の力(あるいは手段)を神の名によって保証する、「法」の「暴力」なのである。法の侵犯は、必ずやそこに神からの「暴力」を呼び寄せることになる。ならば、「暴力」の悪循環に陥ることのない、法の侵犯とは不可能なのだろうか。つまり、「法」を批判する者は、「法」によって常におのれの血の犠牲を強い

られることになるというのだろうか。我々の世界に「法」という「言語」が存在している以上、この「法」あるいは「言語」を暴力の悪循環に陥らず変革することは不可能なのだろうか。この問題を以下の論考で問い掛けることになる。

上の課題に私は、ベンヤミンの言語論で言われている変革の可能性を読み込むことができるのではないかと考えている。ベンヤミンの言語論は、総じて観念論的な手法に貫かれているが、そこでは主に「言語」と「認識」(Erkenntnis)が問題にされている。彼は「カント的思考の類型」⁴に「言語」を組み込むことで「経験」と「認識」にまつわる形而上学を形作るのだが、それはカント的な思考の類型を「ことば」(Wort)の形而上学的性格によって基礎づけることで、規則化された「言語」を変革しようとするものである。「言語」を変革するために「ことば」に注目するベンヤミンは、それゆえ、社会的に了解された「言語」の分析で満足することはない。彼は広く了解された「言語」に疑いの視線を向け、「ことば」が本質的に備えているものを読み解こうとする。「ことば」とは、「言語」のうちに認められる本質的なものの痕跡だが、「言語」に痕跡としての「ことば」を読み込もうとする作業こそ、ベンヤミンの言語論で試みられる変革なのであり、規則化の「暴力」を廃棄へと至らせようとする目論見なのである。その意味では「ことば」へと目を向けることこそが、「言語」を変革するための目標とされるのである。

本論考の出発点は、カント的思考の類型にのっとった「言語」と「認識」についてのベンヤミンの解釈である。ベンヤミンはカントの思考枠組みを批判しつつ引き受けているが、それは、カントが「認識」を語る際の思考枠組みが、形而上学を一切排除した「経験」を採用しているにもかかわらず、基本的には形而上学を介在させる余地を残していたことに因る。カントの思考枠組みを形而上学へと拡張するベンヤミンは、その枠組みが形而上学たりうるために「ことば」をその根幹に据えるのである。「ことば」による「言語」の変革は、「言語」を「暴力」の一形態として捉えることで、「言語」の強制的性格すなわち神話性を暴露することになる。その神話的な側面を暴露された「言語」は、同時に「ことば」の視線によって「言語」本来の容姿を回復させる

⁴ Walter Benjamin: “Über das Programm der kommenden Philosophie”, *GS* II-1, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag, 1977, S.160. 「来るべき哲学のプログラム」は以下「プログラム」と略記する。

ことになる。「言語」の変革と回復は、「ことば」によってなされるものなのであり、そこに真の「認識」が獲得されることになる。ここに見る「ことば」と「言語」の絡まりを分析するために私が用いた論文は、「来るべき哲学のプログラム」(1918)⁵、「知覚について」(1917)、『ドイツ悲劇の根源』(1925)である。

更に本稿後半部では、「ことば」そのものの意味を問う論文「言語一般および人間の言語について」(1916)を考察することで、「ことば」そのものの本質を見極めようとしている。口に出され、音声化された「ことば」が、「言語」へと固定化したとき、「言語」という「法」は、我々に服従を迫ってくるのであり、その見せしめとして「運命」を背負わされた犯罪人を我々の眼前へと晒すのである。

1 「言語」の変革について

1925年5月12日付、フランクフルト大学哲学部美学科に提出された教授資格申請論文『ドイツ悲劇の根源』⁶の冒頭部「認識批判的序論」で、ベンヤミンは対象を捉える試みを「哲学」と「数学」に区別している。数学は「方法」を用いることで、厳密に事柄に則した「認識」を獲得しようとするが、「哲学」は、「言語が指し示す真理の領域」を「叙述」(Darstellung)することで「認識」を捉えようとする。数学は、幾何学的方法によって(*more geometrico*)「認識」を導き出し、哲学がなす「叙述」による「認識」の獲得を放棄した。このことは数学が「真理の領域」を獲得することを放棄したことにほかならないのであり、ここに数学と哲学の決定的な断絶が認められることになる。哲学は「叙述」によって「真理の領域」を捉えようとするが、数学は「幾何学的方法」を用いて一般的な公理を措定する。数学にとって公理こそが真理に代わる新たな秩序になるのであり、こうして獲得された秩序によって、数学は世界を体系化するのである。

世界を体系化することで「認識」を獲得しようとする数学と、「真理の領域」を叙述することで「認識」を獲得しようとする哲学の差異、ベンヤミンは後者の解釈に立

⁵ 「来るべき哲学のプログラム」の執筆年についてはゾーアカンプ社版『全集』の表記に拠っている。以下参照。“Chronologisches Verzeichnis”, *GS* VII-2, Frankfurt am Main; Suhrkamp Verlag, 1989, S 940.

⁶ 『ドイツ悲劇の根源』は Walter Benjamin: *Ursprung des deutschen Trauerspiels*, *GS* I-1, Frankfurt am Main; Suhrkamp Verlag, 1974. を使用し、以下『根源』と略記する。

脚しつつ、「来るべき哲学」をカントの思考の枠組みと関連づける。

哲学がいまこの時代ならびに予期される広大な未来から感じとっているこのうえなく深い予感を、カントの体系に関連づけることによって、はっきり認識できるかたちに仕立て上げること。⁷

ベンヤミンが「哲学」に感じている予感とは、いかにして数学による体系化から「認識」を救い出すことができるのか、この課題をカントの思考枠組みに拠りつつ解決することができるのではないかという予感である。すなわち、カントの思考枠組みの形而上学的側面によって「認識」を数学による世界の体系化から救い出す道が哲学には残されているとベンヤミンには思われたのである。しかし、そのためには「来るべき哲学」はカントの思考枠組みとある一点で根本的に対立しなければならない。それは「経験」についてのカントの見解であり、カントが「啓蒙主義の経験」を彼の思考枠組みへ採用してしまったことへの批判なのである。「啓蒙主義の経験」とは、「その実質価値がゼロに近づいた経験、それ自体の確かさによってしか意味（それも貧弱な意味）を獲得し得なかったであろうたぐいの経験」⁸であり、そこでは一切の形而上学が排除されていた。この「経験」概念をカントが、あるいはカント以降の新カント派の思想が取り入れてしまったことにベンヤミンは不満を漏らしている。カントの思考枠組みの形而上学的側面を強調することで、「来るべき哲学」は「真理の領域」を正しく叙述することができるようになる、これこそベンヤミンがカントに注目する最大の理由なのであり、そのためにもカントが採用してしまった「経験」についての読み替えがどうしても必要だったのである。

形而上学は理念を介して経験全体を神の概念(Gottesbegriff)に直接結び付ける力を持っている。⁹

⁷ Walter Benjamin: “Über das Programm der kommenden Philosophie”, *GS* VI-1, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag, 1977, S.157.

⁸ Walter Benjamin: a.a.O., S.159.

⁹ Walter Benjamin: “Über das Programm der kommenden Philosophie”, *GS* VI-1, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag, 1977, S.164.

「認識」とは、形而上学的な枠組みに照らして初めて捉えられるものなのであり、こうした形而上学的なものが想定されることで「力学的経験」、「宗教的な経験」をも捉えることができるようになる。この形而上学的なものこそが「神の概念」（あるいは「原概念」: Urbegriff）なのである。ここで言われる「神の概念」とは「言語が指し示す」といわれているように、「言語」の根源的な場なのである。ハーマン（Johann Georg Hamann, 1730-1788）が言うところの「文法のもろもろの基礎概念」（Grundbegriffe der Grammatik）¹⁰とは、広く了解されている「言語」が従う「文法」の「原概念」、すなわち「言語」がいまだ文法にまで規則化されていなかった先史の「ことば」世界のことなのである。ここでベンヤミンがハーマンを意識しつつ「認識を言語に関係づける」¹¹と言うとき、それは「ことば」世界と我々の日常「言語」とをぶつけあうところに真の「認識」が立ち現れると言っているのである。我々が用いる「言語」もしくは種々の経験は、「理念」を介して「原概念」へとぶつけ合わされることで、おのれを変革させるのである。

数学は「力学的経験」あるいは「幾何学的方法」によって、「言語」もしくは「経験」が従属すべき公理を措定した。一方で「哲学」は、「原概念」という形而上学的なものを想定することで、「言語」もしくは「経験」が未だ規則化されていなかった状況を「言語」あるいは「経験」のうちに読み込むことになる。哲学的な変革は、先史世界の眼差しが「言語」あるいは「経験」を捉えることで成し遂げられ、一切の体系が瓦礫化した後に残る剥き出しの「言語」もしくは「経験」を注視する。「認識」とは、そのような剥き出しの「言語」もしくは「経験」へと向けられた視線のうちに立ち現れるものなのである。数学ではこうした偉業は成し遂げられない。なぜなら、数学はおのれが措定した規則性に沿って「言語」なり「経験」を繋ぎ止めようとし、「言語」もしくは「経験」の先史的な容姿を見いだそうとはしないからである。数学にとって「言語」もしくは「経験」とは、一切の真理を排斥してもなお残る確実なものなのであり、このようなニヒリズムは、「言語」なり「経験」の変革を志向しない。

¹⁰ Walter Benjamin: a.a.O., S.166.

¹¹ Walter Benjamin: a.a.O., S.168.

ここに「哲学」の、数学にはない変革の眼差しが認められるのである。

カントは、哲学的認識は絶対的に確かかつア・プリオリなものでなければならないという意識を強く持ちすぎ、哲学のこのような数学にも匹敵する側面を意識しすぎたがために、すべての哲学的認識は唯一言語においてのみ表現され、式や数で表現されるのではないという単純な事実を、完全に忘れてしまった。しかし究極的には、この事実こそ決定的なものとして主張されてしかるべきであり、それにまた、この事実があるからこそ、あらゆる科学に対して、そして最終的には数学に対しても、哲学の体系的優越が確保されるのである。¹²

2 「言語」の瓦礫化で立ち現れるもの

「言語」を「ことば」にぶつけることでもたらされる変革は、「全般において、神学とさえ呼ぶことができるであろうし、あるいは、これがたとえば歴史的・哲学的な要素を含んでいるということを考慮に入れるのであれば、そのかぎりでは、神学を越えたものと言える」¹³。そして、この「神学を越えた」思考こそ、「神の概念」をその中心に据えた「来るべき哲学」にほかならないのであり、『根源』の冒頭部「認識批判的序論」でも、「プログラム」で言われた「来るべき哲学」の様相が示されているのである。

ことばは、学問の唯一の叙述媒体なのであって、しかも、ことばそれ自体は記号ではない。というのも、ことばは、もちろん記号に相当するような概念ならば弱められることになるのだが、まさに同じことばが、理念としてその本質的なものを所有しているからである。¹⁴

「ことば」と「記号」(Zeichen)の区別、それは先史世界にあった「言語」の容姿と、歴史の過程にあつて構築された「言語」に言い換えることもできる。「ことば」とは

¹² Walter Benjamin: a.a.O., S.168.

¹³ Walter Benjamin: a.a.O., S.168.

¹⁴ Walter Benjamin: a.a.O., S.222.

それゆえ、前史的なものなのであり、「ことば」が歴史的な規則性に倣うことなどない。「ことば」は、ただその「ことば」を創造した者、すなわち神の規則に倣うのである。他方で「記号」とは、歴史の過程で構築されたものであり、「記号」が依拠する規則性も歴史の過程にあつて構築される。「記号」から削ぎ落とされたもの、それがここで言われている「理念」なのであり、「ことば」が持つ本質的なものなのである。

ベンヤミンが思い描く「来るべき哲学」は、広く了解されている「記号」を「ことば」に照らして変革しようとし、その意味では「記号」が従属する規則を廃棄へと至らせるものである。「ことば」とは変革への指標なのである。「記号」あるいは諸々の「現象」が「理念」に触れ合うことで、「現象」は変革される。そのようにして似非真理を瓦解した「現象」は、真の統一へと至らされることになるのであり、ここに「現象」はその剥き出しにされた容姿を我々の眼前へと晒すことになるのである。「理念」の炎に焼き尽くされた「現象」があとに残すもの、それが剥き出しにされた「名前」(Name)なのである。

「記号」から一切の伝達的な意味が廃棄された後に残された「名前」は、明確に「現象」あるいは「言語」とは区別される。「記号」とは、その意味が歴史的に決定され、ある定められた規則に乗っ取ってその〈意味するもの〉と「記号」とが繋ぎ合わされる一方で、「名前」とは、一切の規則が廃棄され、そのうちに「理念」を宿すからである。「名前」とは、先史にあった人間の「ことば」の記憶なのであり、この記憶を「言語」の変革によって呼び出した哲学的な人間は、真の意味で「認識」をなす者になるのである。つまり、樂園にあった人間が神によって「認識をなす者」に造られた、あの旧き樂園にあった人間が「言語」の瓦礫化によって露にされた「名前」の前に立つことになるのである。「名前」は、そのうちに宿る樂園にあった人間の「ことば」を哲学的な人間へと向け返し、人間を真に「認識」するものへとするのである。

3 名づける「ことば」について

「理念」の炎によって焼かれた「言語」の残骸のなかに、人間は「名前」を発見する。その「名前」は人間に「ことば」の記憶を呼び覚ますのであり、そこで人間は真

に「認識」をなす者となる。「哲学的観想」が目指す変革の目的は、真の意味で人間が「認識」を獲得することにあるのであり、そのためにも「理念」による「言語」の互換化が必要なのである。「ことば」が蘇った人間は、その「ことば」を用いて世界を「認識」することができるようになる。そのためにも、樂園の生活にあつて人間が用いた「ことば」の機能が哲学的な人間のうちに再生されなければならない。樂園にあつて人間がもちいていた「ことば」とはいかなるものだったのだろうか。以下では、ベンヤミンが1916年の「言語一般および人間の言語について」(1916)¹⁵で言っている「ことば」について、その成立と機能を確認する。

人間がいまだ樂園にあつたとき、人間は事物に備わった神の「創造することば」を聴き取ること(「啓示」: *Offenbarung*)ができていた。それは神が人間におのれの「ことば」を贈ったことに因るもので¹⁶、この神から与えられた「ことば」を用いて人間は事物の「名前」を耳にすることができたのである。

神は人間をことばへと従属させず、むしろ神は創造の媒質として用いられたことばを人間に解き放ったのである。神は自身の創造者的なもの(*sein Schöpferische*)を人間のうちへと解き放ったとき休まれた。¹⁷

神から人間へと贈られた「ことば」とは、「創造することば」のことだが、たとえその「ことば」が神的なものだとしても、人間は創造の時間のうちに存在するものではない。人間は創造の最後に造られたのであり、神が「ことば」を発した時間とのずれがそこには認められる。それゆえに人間の「現在時」(*Aktualität*)にあつて、「創造することば」は創造の時間を離れ、「認識」を司る「ことば」へと変化する。神は「創造のことば」で事物を創造した。そして、神は事物に「固有名」(*Eigenname*)を与えた。あらゆる事物は、こうした過程を経て創造されたのだが、人間は神から与えられたその「ことば」を用いて事物に命名する。人間はそこで事物へと与えた「名前」

¹⁵ 「言語一般および人間の言語について」は、以下の版を利用した。Walter Benjamin: "Über Sprache überhaupt und über die Sprache des Menschen", *GS* II-1, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag, 1977. 以下「言語一般」と略記する。

¹⁶ Walter Benjamin: a.a.O., S.147.

¹⁷ Walter Benjamin: a.a.O., S.149.

によって事物を認識することになる。神は、おのれの「ことば」を神自身の模造品である人間へと贈り渡すことで、人間という「認識する者」(Erkennenden)を造ったのである。

人間が事物を命名すること、これをベンヤミンは、人間による「事物の言語」の「翻訳」(Übersetzung)と呼んでいる。「翻訳」とは、人間が神によって与えられた事物の「固有名」を聴き取るという意味では、神と人間の「ことば」による連帯を意味し、同時に、沈黙する事物の「名前」を音声化する(lauten)という意味では「不完全な言語を完全な言語へと翻訳すること」¹⁸で事物との連帯をはかることなのである。事物、人間、神との「ことば」によるトリアーデは、墮罪以降人間が神のもとを離れ、彼ら人間が事物へと与えたその「名前」を単に記号へと置き換えてしまう(＝言語化)状況よりはるかに親密なものだった。¹⁹人間による事物の命名は、神がそのように定めているがゆえにそうすることができたのであり、人間の前に進み出た動物は、そこで人間によって声に出して呼ばれるが、その場面で人間が動物に与える「名前」は、動物のうちに沈黙している神の「創造することば」(＝動物のなかで「認識する名前の萌芽」²⁰となっているもの)を言語化したものだったのである。²¹

樂園にあった人間は、その「ことば」によって神とも事物とも連帯をなしていたのだが、墮罪によって人間はこの連帯を解消してしまったのであり、それ以降人間は、事物を「啓示」によって聴き取ろうとはしなくなった。今や人間はおのれが形にした規則性に倣って事物に命名するようになったのである。これが墮罪以降の人間の「過剰命名」²²を生みだした。墮罪によって樂園を追放された人間が、事物の「名前」を「記号」へと置き換える理由はここにあるのであり、神から遠くに隔たることが、同時に事物のうちに神の「創造のことば」を聴き取る能力さえも後退させてしまったのである。このように、人間が神の「ことば」を聴き取る能力を衰退させてしまった状

¹⁸ Walter Benjamin: Über Sprache überhaupt und über die Sprache des Menschen", GS II -1, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag, 1977, S.151.

¹⁹ Walter Benjamin: a.a.O., S.152.

²⁰ Walter Benjamin: a.a.O., S.151.

²¹ Walter Benjamin: a.a.O., S.157.

²² Walter Benjamin: a.a.O., S.155.

態をベンヤミンは人間の「事物の直観からの離反」²³と呼んでいる。墮罪以降人間の言語使用は、人間によって呼ばれた「名前」、すなわち、「記号」だけを頑なに固辞することへと力を注ぎ、ここに「記号」となった「名前」そのものを頑なに維持しようとする人間言語の墮落が生じる。そのことが人間と事物との間に暗い影を落とすことになるのである。

「言語一般」で言われる「ことば」の機能、それは、神が人間に与えた「ことば」によって人間が事物へと命名することであった。したがって、ベンヤミンが『根源』で「理念」の機能を「みずからの命名する権利を要求することば」²⁴と言うとき、それは、樂園で神が人間へと与えた「ことば」のことを言っているのである。哲学的な人間はこのような「ことば」を用いることで、事物の名前を聴き、その名前で事物を「認識」することになる。その意味では「哲学」があらゆる規則性に従わされた事物の「名前」を解放し、そこに「言語」への変革をもたらせることも、「ことば」によって可能になるのである。

4 言語化と「法」の措定について

周知のように、人間は「認識の木の実」を口にすることで樂園を追放された。「認識の木の実」は、善悪の判断を人間の「ことば」のうちに生み出すことになったのだが、この判断はそれ以前の神の「ことば」を聴き取る能力とは異なり、事物の「名前」を直接的に捉えようとする判断を人間の「ことば」のうちに生み出すことになった。ベンヤミンはこの直接的な判断を「裁くことば」²⁵と言っているが、それは人間の「ことば」が、聴き取る能力を衰退させ、過剰命名によって与えられた「名前」の意味を判断する使用へと移行したことを意味する。墮罪以降人間は「言語」となった事物の「名前」の意味（「記号」）を、厳格に規定することになるが、この判断の萌芽は、人間が樂園に実る「認識の木の実」を口にしたことによる。地上に墮ちた人間は、神からも遠ざかり、同時に事物に宿る神の「ことば」の痕跡からも遠ざかってしまったの

²³ Walter Benjamin: a.a.O., S.154.

²⁴ Walter Benjamin: *Ursprung des deutschen Trauerspiels*, GSI 1, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag, 1974, S.217.

²⁵ Walter Benjamin: a.a.O., S.154.

である。言語化によって「記号」と化した事物の「名前」は、今度は「判決の呪術」²⁶に服させられることとなる。それはすなわち、人間の「言語」のうちに明確な意味が指定され、このそれぞれの意味が個々の「名前」と結び合わさる、そのような呪術なのであり、こうして規定された「記号」がその使用の真偽を判断することになるのである。樂園での人間の「認識」は事物の「名前」を聴き取ることで獲得されていたのだが、墮罪以降人間の「認識」は、おのれが指定した「記号」の意味を判断する、そのような「認識」へと変化したのである。「言語の根本」²⁷は、人間がおのれの指定した「記号」の意味を判断する、あるいは明確に規定するところに生じたのである。

〔直接的な裁きが生じたのは〕、人間が、墮罪のうちに具象的な物の伝達における直接性を——つまり名前を——離れて、手段と化したことばの、虚しいことばの深淵〔中略〕に陥ったときだった。〔中略〕この途方もないアイロニーが、法の神話的根源の目印である。²⁸

墮罪以降言語化された「名前」は、「記号」へと置き換えられる。人間の「ことば」には、「名前」を「記号」へと貶める性格が、創造の初めから備わっていたのであり²⁹、墮罪でその性格が際立つことによって、人間は遂には「名前」を単なる「記号」へと貶めることとなったのである。この「記号」への「名前」の凋落こそ、「法の神話的根源の目印」なのである。つまり、墮罪以降人間の「言語」はその意味を歴史的に規定するようになったのであり、それは神話的に規定された「言語」の意味を「裁きのことば」によって維持するようになったということなのである。樂園での人間の「ことば」は、認識の木の実を口にすることで、そのうちに善悪の判断を形作ることになり、墮罪以降言語の使用をおのれの規則に則って規定するようになったのである。墮罪によって神の「ことば」あるいは事物の「名前」を離れた人間は、それによっておのれが指定した「記号」の意味を頑なに維持することになったのである。「裁きのこ

²⁶ Walter Benjamin: a.a.O., S.154.

²⁷ Walter Benjamin: a.a.O., S.154.

²⁸ Walter Benjamin: a.a.O., S.154.

²⁹ Walter Benjamin: a.a.O., S.156.

とば」は、この「記号」の意味を維持するために判断をなすのであり、他の人間にもそのように強いるようになる。墮在以降の人間による言語化とは、それゆえに「記号」という「法」を人間が措定することなのである。

5 「言語」を変革する予感

「言語」（記号）という「法」になった墮在以降の「名前」は、神の「ことば」を離れ、「記号」の意味を規則化し、維持していくことになる。人間は、言語化の目的を「記号」の意味を画一化することに見いだすのであり、意味を維持するために「暴力」を手段として用いることになる。言語化の目的は、〈記号化〉という規則性すなわち「法」そのものを維持することへと向けられるのであり、「記号」そのものを維持するわけではない。「法」の維持には、守護者が必要とされ、その守護者が「記号」の規則を伝達し、教化する。教育的な目的はこの「記号」の規則を正確に伝達することへ注がれ、その意味で教師とは「法」を維持する守護者になるのである。

「法」を維持する教師が「法」を伝達し、教化することで、人間は「記号」の意味を正確に事物に一致させることになるのだが、そのようにして意味を植え付けられた事物の悲しみは、樂園での人間による命名の悲しみとは比較にならないほど深いものとなる。それは墮罪以降の人間の「言語」が、もはや神の「ことば」によって名づけられた事物の「名前」を聴き取ることなく事物へと過剰命名するからである。人間は事物に対して「戦争の暴力」³⁰を仕掛けるのであり、それに準拠しつつ人間は「法」を措定するのである。

墮罪以降人間は、力あるものが「法」を措定し、その権力下に人々を従わせるのだが、そのようにして「法」というシステムに回収された人間は完全に無抵抗な存在になってしまうのだろうか。言語化された事物の悲しみは、再び神によって呼ばれる至福へと至ることはないのだろうか。法システムに搦め捕られた人間あるいは事物の「悲しみ」は、密かに神話の英雄、すなわち神話の神々に叛逆する犯罪人へと向けられることになる。そのような密かな望みが沸き起こる理由は、「法」を変革する可能

³⁰ Walter Benjamin: "Zur Kritik der Gewalt", *GS* II-1, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag, 1977, S.186.

性を犯罪人の行為が指し示しているからであり、彼らの行為がすでに「法」の埒外にあるからである。「法」は、おのれが権力を行使する範囲にまで規則を適応しようとするので、これら犯罪人に対しても同様におのれの権力を行使しようとする。犯罪人は「境界」を乗り越えてやってくるので、神話的な法は、自国の「境界」を防衛しなければならない。³¹だが神話の神々が行使する権力に「境界」が画定されていて、その外部が存在しているという証が法システムの内部へと入り込むことによって、内部世界に住まう人々は、神々の神話性そのものを打ち倒すことができるのではないかという希望を心に抱くことになる。犯罪人の謀反は、神々による神話化の外部世界を暴露するのであり、外部世界から境界侵犯をなすことで、内部世界の人々に変革の希望を呼び覚ますのである。

変革への希望を呼び覚ます外部世界の存在、ならば「言語」を変革するにあたって「言語」世界の外部とはどこに見いだされるのだろうか。「言語」の変革を予感させるもの、それこそが「根源」(Ursprung)にほかならない。「根源」とは、「あくまで歴史的なカテゴリーではあるが、それにもかかわらず生起とはいかなる共通点をもたないものなのであり、根源において志向されるものは、〔中略〕生成と消滅から発生してくるもの」³²、そのような消滅と発生の背後に位置するものなのである。そしてこの「根源」を浮かび上がらせるものこそ「理念」の働きなのである。「理念」は「繰り返して歴史的な世界と交戦する」³³のであり、そうした戦いを通して「根源の現象」(Ursprungsphänomen)を決定する。すなわち「言語」における外部世界にあるものとは、「理念」という「ことば」の働きなのであり、樂園にあった人間の「名前」を聴き取る能力なのである。

「理念」は、おのれの炎によって「現象」に纏わりついた似非真理を瓦礫化し、一切の「規則」を廃棄する。「言語」の「変革」はそれゆえに「理念」によってなされるということになるのだが、この「理念」が「ことば」に関わるというのであれば、樂園を離れた人間にその能力を再生することなど不可能なのではないか。人間におけ

³¹ Walter Benjamin: a.a.O., S.198.

³² Walter Benjamin: *Ursprung des deutschen Trauerspiels*, GS1-1, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag, 1974, S.226.

³³ Walter Benjamin: a.a.O., S.226.

る「ことば」の痕跡を我々は見いだすことなどできるのだろうか。

墮罪以降の人間はあらゆる事物を言語化するが、人間にはいまだ神が与えた「ことば」の痕跡が備わっている。この可能性をベンヤミンは人間が子どもに対しておこなう「名づけ」に見ているが³⁴、それは人間にいまだ神の「創造のことば」の痕跡を読み解く能力がかすかながらにも残っていることを証明している。人間が子どもに与える「固有名」こそ「人間の音声になった神のことば」³⁵なのであり、人間は墮罪以降すべての「ことば」の能力を衰退させてしまったのではないという証になるのである。人間の「言語」は「名前」を聴き取る能力を忘却してしまったわけだが、それでも人間にはいまだ「神のことば」を間接的に聴き取る能力が備わっている。「固有名」によって名づけられる人間は、その「固有名」が「神のことば」によって呼ばれたものであるという保証を受けることで神との連帯を再び結び結ぶことになる。つまり、人間は子どもに「固有名」を与えることで、神によって名づけられた子どもの「名前」を聴き取るのであり、この「名づけ」こそ、墮罪以降の人間の「言語」使用にあってもいまだ樂園にあった「ことば」の能力が人間に備わっていることの証拠となるのである。そしてこの人間の「言語」にはいまだ樂園にあった「ことば」の痕跡が残されているという予想外の結論は、「理念」とは一体何なのかという問いに対するヒントを与えてくれる。

「理念」と「現象」の衝突した後の瓦礫のなかに、哲学は「名前」を発見する。人間は「現象」に関わることは可能だが、言語化された世界で「理念」を自由に扱うことなどできない。「理念」が「真理」に関係しているということは、それが先史世界に関係している証拠となり、そのような世界に墮罪以降の人間は直接的に関わることはできないからである。したがって、「理念」と「現象」の衝突を人間は、事後的に捉えるのであり、瓦礫化した「現象」の痕跡を見いだすことしかできないのである。そんな瓦礫のなかに人間は「名前」を発見するのである。剥き出しになった「名前」は、樂園での人間の「ことば」の記憶の断片を留めているのであり、その「名前」が「ことば」の記憶を人間へと呼び覚ますのである。「名前」によって呼び覚まされる

³⁴ Walter Benjamin: "Über Sprache überhaupt und über die Sprache des Menschen", *GS* II-1, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag, 1977, S.149-150.

³⁵ Walter Benjamin: a.a.O., S.150.

のは、人間の命名する「ことば」の記憶なのであり、そのような痕跡を人間は瓦礫の中に見つけるのである。「理念」とは、この名づける「ことば」のうちに与えられるものなのであり、名づけられた事物はその「名前」のうちに「理念」を保存することになるのである。

諸理念は、無志向的に、名づけることのうちに与えられ、そのような諸理念は哲学的な観想において復元されなければならない。³⁶

人間には未だ「神のことば」を聴き取る能力が備わっているということは、人間にいまだ「名前」を見つけるかすかな能力が備わっていることを意味する。そのかすかな能力を瓦礫と化した「現象」へと向けることで、哲学的な人間は「名前」を発見するのである。「理念」は名づけによって「名前」のなかに与えられるのだが、人間が瓦礫のなかに発見した剥き出しの「名前」は、まさにこの「理念」をそのうちに宿しているのである。この「名前」に備わった「理念」を発見することで人間は樂園にあった「ことば」を少しだけおのれのもとに引き寄せることになるのである。

おわりに——「ことば」の回帰

「ことば」とは、ベンヤミンにとって先史時代にあった人間の、「名前」を聴き取る能力だったのだが、それは「記号」となった人間の「言語」を変革するうえで指標とされるものだった。墮罪以降の人間は、「ことば」の記憶を剥き出しにされた「名前」のなかに見つけるのだが、それは「名前」に備わった「理念」によって人間に呼び覚まされた樂園の記憶だったのである。「理念」だけが神話的な「暴力」を打ち砕くことができたのであり、この「理念」による「暴力」の廃棄がベンヤミンには真の「変革」と捉えられていた。したがって、ベンヤミンが言う暴力の批判は、「暴力」そのものへの「理念」による批判と捉えられなければならないのである。

ベンヤミンが目指す「変革」は「暴力批判論」でも取り上げられている。そこで言

³⁶ Walter Benjamin: *Ursprung des deutschen Trauerspiels*, GSI・1, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag, 1974, S.217.

われている「変革」とは、「プロレタリア革命」のことであり³⁷、その際彼はソレル（Georg Sorel, 1847-1922）による政治的考察に拠って「変革」を区別している。ベンヤミンの言う「変革」はその連関から言えば、プロレタリアートの解放を志向するサンディカリスムの言説と区別がつかない。この革命運動は、労働者階級の解放を目的とし、その手段として「ゼネスト」を用いる革命運動であった。そして彼らが目指す目的のために「非議会主義」の立場がとられ、そのために直接行動、労働者主義、経済連合主義が主張された。この革命運動にベンヤミンが共感している様子が認められる。それは「暴力批判論」で革命の可能性をソレルの解釈に照らして語ること、すなわち「プロレタリアゼネスト」が「根源的な変革」(Umsturz) を目指して闘争することが、マルクスが言うように、一切の法措定を目標としていないこと、このことにベンヤミンは共感しているのである。この革命観をソレルとベンヤミンは共有している。ソレルの言う革命とは、それゆえ新たなる「法」を措定することがないという意味で「アナーキズム的」な革命思想と捉えられる。このような文脈から、ソレルの革命思想は「法的契約」を合法化する「議会」に対するあからさまな批判を展開させることになるのだが、この「非議会主義」は、「法」の措定に対する剥き出しの嫌悪感を示すベンヤミンの革命観にも認められる。その意味では、ベンヤミンの革命思想にある種の「アナーキズム」が認められるのである。

しかし、「歴史の概念について」第十四テーゼのクラウスの引用、「根源こそが目標なのだ」³⁸にも見られるように、ベンヤミンは革命を「根源」に照らして思考していることも事実で、その限りでは、「根源」こそが革命を革命ならしめる手段として捉えられているのである。「暴力批判論」に見られる「非議会主義」は、確かに「法」の措定を廃棄するサンディカリストの言説に拠っているが、そこでベンヤミンが求める変革の手段は、彼らサンディカリストたちとは根本的に異なっている。ベンヤミンは「紛争の、まったく非暴力的な調停は可能なのだろうか？」³⁹という問いに対して

³⁷ Walter Benjamin: "Zur Kritik der Gewalt", *GS* II-1, Frankfurt am Main; Suhrkamp Verlag, 1977, S. 193-195.

³⁸ Walter Benjamin: "Über den Begriff der Geschichte", *GS* I-2, Frankfurt am Main; Suhrkamp Verlag, 1974, S. 701.

³⁹ Walter Benjamin: "Zur Kritik der Gewalt", *GS* II-1, Frankfurt am Main; Suhrkamp Verlag, 1977, S. 190.

「話し合い」(Unterredung)の可能性を示唆しており、「直接的解決的手段ではけっしてなく、つねに間接的解決の手段」⁴⁰としての「変革」を志向しているのである。ベンヤミンの言う「変革」とは、それゆえ「歴史哲学テーゼ」で言われるところの「根源」に照らした「変革」を志向するものなのであり、サンディカリストたちの革命思想で求められる直接的解決とは一線を画する革命思想なのである。

「根源」、それは「繰り返し歴史的な世界と交戦する」「理念」へと「現象」が晒されることで立ち現れる「変革」への指標なのである。それゆえベンヤミンが「変革」を語る際、それは、「理念」によってなされる「現象」の「変革」を意味し、その究極的な目標は、人間に「ことば」の記憶を取り戻すことへとむけられるのである。

名づけることのうちに与えられる「理念」が、「無志向的」なものだとすれば、「理念」による「現象」の変革はいかにしてなされることになるのだろうか。「変革」は、「法」指定の領域では生じえない。もし新たな法の指定によって「変革」が目論まれるとすれば、それは再び血の「暴力」を呼び覚ますことになり、「暴力」の悪循環へと陥ってしまうことになるからである。一切の「暴力」が廃棄される場所、それこそがベンヤミンの言う「変革」の場となるのだが、ベンヤミンにとってそれは「神的な暴力」が行使される場でしかありえない。つまり、「民数記」に登場するコラ一族に対してなされた殲滅の「暴力」こそ、一切の「暴力」が廃棄された場となるのである。

純粋な「変革」は、神による殲滅の「暴力」によってのみ可能なものとされる。しかし、この「変革」が神の領域で生じるものなのであれば、それは我々人間が「認識」によっては捉えることなどできない「変革」となってしまう。あらゆる神話的な「暴力」を変革するために、その都度神からの直接的な「暴力」を待ち望んでいたのでは一向に法の暴力を瓦解させることなどできないのであり、神による直接的な「暴力」が生じるその場を前もって人間が「認識」することなどできるはずがないという結論しか導き出すことはできないだろう。「人間にとって、ある特定の事例において純粋な暴力がいつ本当に生じたのかの決定は、即座にできることでも、差し迫ったもので

⁴⁰ Walter Benjamin: a.a.O., S.191.

もない」⁴¹⁾であり、その意味では神による「暴力」を「変革」の手段とすることは不可能になる。「暴力」による「法」の直接的な変革は、神にのみ可能な「変革」なのであり、人間には不可能なのである。

ベンヤミンは人間がいまだ「ことば」を聴き取る能力を持ち合わせていると言っていた。それは瓦礫と化した「現象」のなかに剥き出しにされた「名前」を発見する能力として、あるいは子どもに名づける能力として、人間の中にいまだ備わっているものなのであり、樂園にあった人間の「ことば」の記憶を呼び覚ますものだった。つまり、人間は直接的にはなくとも、事後的に「ことば」の痕跡を発見する能力は持ち合わせているのであり、この能力をもってすれば「神的な暴力」が行使された場をも発見することができるのである。そしてそこに新たな「ことば」の記憶を発見することができるのである。「神的な暴力」が、殲滅の後に「法」を残すことはない。しかし、コラの一族の殲滅が「血を流すことがなく、打ちのめす、罪を浄める執行」⁴²⁾だったのであれば、後に殲滅の痕跡すら残すこともないだろう。これではいくら人間に「ことば」を聴き取る能力が残されているとは言え、その痕跡を発見することなどできないだろう。しかし、ベンヤミンが言う「神的な暴力」とは、何も「生きているものの魂を全くもってお構いなしに破壊する」⁴³⁾のでは決してない。「神的な暴力」は「財産」、「法」、「世間」(Leben)を破壊するのであり、生きているものの「魂」(Seele)を破壊するのではないのである。人間の「魂」には「財産」、「法」、「世間」の記憶が染みついているのであり、その記憶を頼りに破壊の痕跡を探し求めることは十分に可能なのである。

ベンヤミンの言う「法」と「ことば」の問題には、人間の前史と後史が深く関わっている。そして形骸化したものに今一度命を吹き込もうとする彼の試みは、世界の細部へと注視することで発見される瓦礫のなかに密かな希望の光を灯すことになる。瓦礫のなかに発見した光を世界に当てはめることなどできない。なぜなら、「理念」というその光はそこにあってこそ光輝いているのであり、宝石箱に入れられた瞬間にその光彩を絶やしてしまうからである。

⁴¹⁾ Walter Benjamin: a.a.O., S. 202-203.

⁴²⁾ Walter Benjamin: a.a.O., S. 200.

⁴³⁾ Walter Benjamin: a.a.O., S. 200.

人間は、犯罪者の暴力に一抹の希望を抱かずにはいられない。それは彼が世界を変革してくれることへの希望なのだが、世界に住まう人間は、彼らよそ者としての犯罪者のその無法者ぶりに対して羨望の念を向けるのである。しかしそのような犯罪者もこの世界に侵入した途端、その身を「法」の網の目に搦め捕られてしまう。犯罪者の踏み絵を前にした人間は、一様に彼を知らないと言う。そしてまた新たなる境界侵犯者へと思いを馳せるのである。

哲学的な観想をする人間は、そんな希望に囚われはしない。彼は世界の細部に先史世界の痕跡を探すのであり、その痕跡に先史世界の記憶を読むのである。彼は「暴力の歴史」を哲学し、その痕跡を追跡するのである。「暴力」が生み出されるところに彼はいる。しかしそれは神話的な「暴力」などでは決してなく、神による殲滅がなされたその現場なのである。